

<p><b>28日</b> <b>(日)</b></p> <p>創世記 11章</p>	<p>「彼らは、『さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう…』と言った」(4節)。「バベルを世界中で栄誉ある都市にしたい」と考えた人々の言葉は、東京の高層オフィスで働く人の言葉と重なる。「この窓から地上を見下ろしていると、世界を獲ってやるぞ!という気になる」。負けが許されない競争に取り込まれた人々の言葉を「乱された」、神の深い知恵を想う。</p>
<p><b>29日</b> <b>(月)</b></p> <p>創世記 12章</p>	<p>「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい』」(1節)。「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」(4節)。七十五歳のアブラムの心に主の言葉が響いた時、彼は行動を起こした。わたしが何かの行動を始める時、その動機はどこにあるのか。「主の言葉に従う」ことが、今日のわたしの行動の動機となるように。</p>
<p><b>30日</b> <b>(火)</b></p> <p>創世記 13章</p>	<p>「アブラムは天幕を移し、ヘbronにあるマムレの榎の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた」(18節)。旅するアブラムは、行く先々で主を礼拝するための祭壇を築き、動物の犠牲をささげ、主の語りかけに聴こうとした。私たちが日々の暮らしの中に小さな祭壇を築くことを大切にしたい。今日、主への感謝を刻み、主の語りかけに聴こう。</p>
<p><b>1日</b> <b>(水)</b></p> <p>創世記 14章</p>	<p>「アブラムはすべての物の十分の一を彼(メルキデゼク)に贈った」(20節)。祭司メルキゼデクの祝福を受けた時、アブラムはすべての「十分の一」をささげた。「十分の一」は大きな闘いを伴うもの。しかし、そのアブラムがソドムの王に「わたしは何も要りません」と毅然と語る姿を見る時、主への「十分の一」が私たちの信仰に「一本の筋」を通していくことを知らされる。</p>

聖書日課 『からし種』 2019.4.28-5.5

<p><b>2日 (木)</b></p> <p>創世記 15章</p>	<p>「主は彼を外に連れ出して言われた…」(5節)、「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」(6節)。主の約束を信じ切れず、つぶやき、ぐずるアブラムに、主は語りかける。「天幕を出て夜空に広がる星を見るように」と。私たちの目は何を見ているか。天幕の中だけにとどまっていないか。満天の空に広がる神の祝福を見ることができているか。</p>
<p><b>3日 (金)</b></p> <p>創世記 16章</p>	<p>「主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シェル街道に沿う泉のほとりで彼女(ハガル)と出会った」(7節)。女主人から理不尽な扱いを受けて追放されたハガルに、主の御使いが現れて信じがたい言葉を告げる。「女主人のもとに帰り、従順に仕えよ」と。時として主の言葉は厳しい方向転換を私たちに促す。が、今は見えなくても、その道に主の祝福と伴いがある。</p>
<p><b>4日 (土)</b></p> <p>創世記 17章</p>	<p>「アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。『わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい』」(1節)。「全き者」とは、ノアやヨブのような「無垢で正しい者」の意味。九十九歳の者に「神にまっすぐ向かい、横道にそれない信仰」を求める神は何と厳しい方だろう。が、そこに隠されている大きな祝福を想う。</p>
<p><b>5日 (日)</b></p> <p>創世記 18章</p>	<p>「アブラハムはなお、主の御前にいた。アブラハムは進み出て言った」(22-23節)。アブラハムは、何度も何度も、主に悪い者と一緒に正しい者を滅ぼさないでほしいと祈り願う。目の前の大きな課題の前に、諦めてしまいたくなる時でも、主は最後には「その十人のためにわたしは滅ぼさない」と決断してくださることに期待して、主の前に進み出て祈る者とされて。</p>